

# 曹洞俳壇

選・村松五灰子

着倒してなほ新涼の色合わせ

東京都 伊奈 三郎

評 秋が来た。そんな涼しさにお気に入りを取り出してあれこれと色の合わせを楽しんで着る。「着倒す」は良いものを長く親しむこだわり。その楽しさを詠う。

ペットロス癒えず二度目の秋となる

群馬県 大瀨 洋

評 我が子同然のような存在であったペットと死別したり、居なくなったりしたときの喪失感を言う。二度目の秋になっても虚ろさが消えない。情の深い句である。

◆命日に会える気がして墓参り

秋田県 津谷 憲生

◆蝮<sup>けつ</sup>鳴きて寺苑の闇を深くせり

島根県 藤江 堯

◆総領の甚六ばかり村祭

秋田県 小田篤恭葉

◆入賞を賭けた棚田の案山子達

長野県 下島 博

◆みせばやにカーテン開かぬままの家

岩手県 阿部 熙子

◆海女の墓潮引き寄せて曼珠沙華

福島県 大槻 弘

◆故郷の山変りなく岩魚釣る

静岡県 水口 淳

◆大根の間引き菜じゃこと弁当に

奈良県 鈴木 重雄

◆秋刀魚焼く老いの二人に米一合

愛知県 戸田 清子

◆補聴器に馴れてはつきり虫の声

新潟県 大橋 恒次

\*選者吟

熱燗の一番客が旅の我

五灰子

\*作句小見

今年の世界の政治や自然界も何かと荒々しいことが多かった年でした。地球の未来まで心配になります。誰もが地球と仲良く大切に作る心の余裕があれば未来は良い方向に向くと思うのですが。

迎える年が良い年でありますように。

# 曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

衰へし視力はときにやさしかり「ぼんやり」  
といふしあはせがある 奈良県 横井 正子

評 視力が衰えてゆくのは何かと不便で嘆かわしいことである。一旦は作者もそう感じたであろう憂いだが、しかし考え直してみれば、見えずぎる疲れもありそうだ。視力を越えた抽象的な暗示も感じられる。

菖稲城わらにおもたに凭もたれつつ子ら風揚げる空の果たて  
を雁の棹せうゆく 秋田県 小田 崑恭葉

評 稲刈りを終えた秋の田園風景の中、風揚げをする子らの姿が伸びやかに捉えられている。失われてゆく日本の原風景。平和な世界がいつまでも続くようにとの願いも籠るようだ。

- ◆蓮の花大きく開くゆつくりと時を忘れて目を開き見る 山梨県 北村 富子
- ◆無理するな無理はするなの言の葉をおくりつづけて夫は逝きたり 福井県 三浦 豊子

◆青空を流れる雲よ伝えてよかなたの友にありがとうとね 京都府 内田 孝子

◆梨の実を落とさず去ぬる台風いに胸撫でおろし梨の実出荷 新潟県 星野 三興

◆身辺をととのへんとして二人して愛した栗の木日を選びて伐る 福島県 佐藤 忠

◆残飯も空家も多きこの日本愛のひかりは足りなくないか 東京都 野村 信廣

◆腕時計肌身離さずつけていた以前のように腕うでに巻きやる 山口県 濱田 道子

◆古い吾にほのかに育つ髪と爪生かさされていと切りつつ思しう 岩手県 穴戸さとる

◆送り団子を甘藷かんじゆの葉に載せ特大のなすびは馬に盆ひら悉しつ無し 兵庫県 前田あつ子

◆石地藏雨と日除けはわら帽子村と青田を見守まもっている 鳥取県 入江 武之

## \*選者詠

目を高く羅うすろまとう月を追う追えば追うほど離さりゆく月 ちづ

## \*作歌小見

亜熱帯化する天候や未来が見えにくいなか、夫の介護や異国の友を気づかう歌、お盆の行事を恙無く終える歌などを拝見すると、濃やかな日常を大切に暮らす人々の息衝きが聞こえてくるようでほっとする。



# 大本山永平寺

## 初雪

永平寺では、十二月一日から八日未明にかけて、お釈迦さまの成道じやうどうをお偲びし、特に坐禅修行にいそしむ、「臘八攝心ろうはつせつしん」を修行します。近くを流れる川の音や線香の香りが、私たちの背筋を伸ばしてくれれます。一週間の坐禅をつとめ、明けの明星を前に、そろそろと僧堂を出ていく修行僧たちは、静けさの衣を身にまとったようであります。

ちようどそのころ、僧堂前の梅の枝や、連なる諸堂の瓦屋根を、初雪がさらさらと撫でていきます。廊下を歩く修行僧の口からは、白い吐息がそうそうと流れ出ています。

ご開山道元禅師さまは、季節の移ろいや雪の美しさをめでながらも「おい！ 後に続く者たちよ。しっかりとやってくれよ」と励ますかの如くに、こんなお歌を残されております。

『花紅葉冬の白雪見しこともおもへば悔し色にめてけり』

私たちの心は、紅葉や雪の景色に惹きつけられ、そればかりに目がいつてしまうものです。一方で、わが身にひきあててみますと、その移ろいゆく季節と等しく、このわが身もトクトクと留まることなく、呼吸を重ねております。幾度目をやっても、その時その時のあり様を、清々しく素直に見たいものであります。

一週間の坐禅修行の後には、雪中に草鞋を濡らす、歳末の托鉢が始まります。心を励まし、雪と大地と一つになって修行いたします。

ご本山だより



## 大本山總持寺



### 臘八摂心会 ろうはつせっしんえ

今年も残り僅かとなり、気忙しくなってきました。皆さまにとりまして今年はどうのような一年でありましたでしょうか。

さて、十二月は臘月ろうげつともいわれ、修行道場にとって最も大切な行持ぎょうじ、「臘八摂心会」が修される月です。

臘八摂心会は、一日の午前三時より八日の未明まで坐禅三昧を続ける修行で、お釈迦さまが成道の際に七日間不眠不休の坐禅をされたことにちなみます。

お釈迦さまは『ダンマパダ』（法句経）の中で、「人の生を受くるは難く、やがて死すべきものの生命いのちあるはありがたし、正法おしえを耳にするは難く諸仏の世に出ずるもありがたし」と示されました。私たちも、尊い命をいただき尊い仏の御教えに巡り会えたことに感謝し、正しく修行するように励みたいものです。

一年の締めくくりに摂心を修するのは、まことに意義のあることとであり、修行僧たちは新年に向けて発心を新たにします。

八日にはお釈迦さまのお悟りを祝う「成道会じょうどうえ」法要が、江川禅師さまご親修により勤められます。

總持寺では来年も、平成三十一年の中興・石川素童いしかわそどう禅師さま百回御遠忌、更には平成三十六年の開祖・瑩山禅師さま七百回大遠忌に向けて歩みを進めてまいります。